

2024年8月25日

年間第21主日

菊地功大司教 メッセージ

福音書は、弟子たちに対して自己決断を迫るイエスの姿が描かれています。人々がイエスを預言者だとかメシアだとか褒め称えていた話を伝えたとき、イエスが弟子たちに、「それではあなた方はわたしを何者だというのか」と問いかけた話が福音の他の箇所にあります。今日もまたイエスは弟子たちに自ら判断するようにと迫ることで、わたしたちの信仰が、誰かに言われて信じるものではなくて、自らの判断と決断に基づいた信仰であることを明示しています。

自らをいのちのパンとして示され、ご自分こそが、すなわちその血と肉こそが、永遠の命の糧であることを宣言された主を、多くの人々は理解することができません。世の常識と全くかけ離れたところにイエスが存在しているからです。多くの人々が離れていく中で、イエスは弟子たちに決断を迫ります。「あなた方も離れていきたいか」。

ペトロの言葉に、弟子たちの決断が記されています。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」。

ペトロの応えの特徴は何でしょうか。それは、ペトロ自身が体験し、納得した事実に基づいている自己決断の言葉であります。ペトロはイエスと出会い、イエスと旅路を共にする中で、イエスこそが永遠の命の言葉であると確信しました。誰かにそう教えられたのでもなく、どこかで学んできたことでもない。自分自身の「イエス体験」に基づいて、ペトロは自己決断をしています。

わたしたちにとって必要なのは、この自己決断に至るための、「イエス体験」、つまりイエスとの具体的な出会いです。

教皇様は、来年の聖年の開催を告知する大勅書「希望は欺かない」に、「すべての人にとって聖年が、救いの門である主イエスとの、生き生きとした個人的な出会いの時となり

ますように」と記し、その上で、「教会は、主イエスをわたしたちの希望として、いつでも、どこでも、すべての人に宣べ伝える使命を持って」といると指摘されます。

教皇様は、キリスト者の人生は希望と忍耐によって彩られているけれど、希望は人生の旅路の中でわたしたちをイエスとの出会いへと導いてくれる伴侶であると指摘されています。

わたしたちには、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人」との出会いの中で、「二人または三人がわたしの名によって集まるところ」において、そしてご聖体の秘跡において、主と直接に出会う機会が与えられています。

さらに教皇様が今回の聖年で示されるように、主における希望を抱きその希望を多くの人にもたらすことを通じて、わたしたちは主との出会いへと導かれます。

主との具体的な出会いを通じて、わたしたちは信仰における確信を深め、自らの決断のうちに、ペトロと共に、「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」と力強く応えるものでありたいと思います。